

Two Henrys : Henry David Thoreau and Henry Beston

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/989

二人のヘンリー：ヘンリー・デイヴィッド・ソロー とヘンリー・ベストン

村上清敏

序

ロバート・フィンチ (Robert Finch, 1943-) というケープコッド在住のネイチャーライター (本人は自分のことを“a place-centered writer”と呼んで欲しいと言っている)¹⁾を知り、その作品の翻訳を行ったり、彼の文学世界に関して発言しているうちに、²⁾ヘンリー・ベストン (Henry Beston, 1888-1968) なる作家の存在、とりわけその代表作である『さいはての家』(*The Outermost House*, 1928) がフィンチの作品に大きな影響を及ぼしていることを知った。ここ数年来、我が国でもアメリカン・ネイチャーライティングの紹介・導入が盛んに行われ、主だったネイチャーライターの代表作はすべて翻訳されたかの観があるのだが、ことベストンに関しては、筆者の知る限りでは、高田賢一氏の短い紹介文³⁾があるのみである。それも無理からぬことで、1988年には『さいはての家』の新版がロバート・フィンチの序文つきでペーパーバックで入手可能になった⁴⁾とはいえ、いまだ「マイナーな古典」⁵⁾以上の評価は得られず、改訂著しいと言われる数種類のアメリカ文学アンソロジーの類からも排除されているというのが現状だからである。⁶⁾

一方で、アメリカ文学史上のキャンノンに列せられ、アメリカン・ネイチャーライティングの「元祖」としての地位までも不動のものとしている⁷⁾もう一人のヘンリーたるヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-62) がいる。昨年(1995年)、アメリカ文学界の大御所であるハーヴァード大学教授ローレンス・ビュエルの手になるソロー研究書⁸⁾が出版され、アメリカ文化形成に果たしたソローの役割が改めてクローズ・アップされたが、600頁近くの大著の中でベストンに関する言及はほんの数カ所に過ぎず、しかもソローの影響がいかに大きいかを例証する存在としてのみ言及が与えられているありさまである。

ネイチャーライティングの隆盛と軌を一にするように、その「元祖」としてのソローのキャンノン化も肥大の一途を辿っているように見受けられるのだが、そこには相当な理由があつてのこととはいえ、あまりにも無批判に一人の作家を神格化し、崇めたてまつるといふのは健全ではないだろう。ラッセ

ル・ライジングは、『使用されざる過去』(1986)⁹⁾において、フレデリック・ダグラスを持ち出してキャノンとしてのソローに揺さぶりをかけることを試みた(それが成功したか否かは意見が分かれるだろう)が、本論ではベストンの『さいはての家』とソローの『コッド岬』(*Cape Cod*, 1865)に関する幾つかの論評を取り上げ、それらを比較検討することで、何とかヘンリー・ベストンの再評価を促したいと思う。

1. 「師匠に対する不当な比較」

まず最初に検証したいのが、ヒンクリーなる人物の論文¹⁰⁾で、この論文の存在は上述したローレンス・ビュエルの書によって教えられたものである。ビュエルは『さいはての家』をソローの系譜に繋がるものの一つとして数え上げた後、そうした作業が「師匠に対する不当な比較」という手順を経てなされる実例として、この論文を取り上げている。¹¹⁾ビュエルが引用しているのは論文中の次の箇所のみである。「ベストン氏はソローのことを知っており、主題においても文体においても、少なからずその後を辿った。ところが、多くの点で、ベストンは先導者を凌いだのである。」

これだけではどの程度「不当」なのか判断がつかず、全文を入手して早速目を通してみた。ところが、「不当」などという生やさしい言葉では不当なまでに激烈なソロー批判の言葉が列挙されており、我が目を疑ってしまった。ソローのキャノン化の過程はビュエルの研究書に詳しく記されているが、1931年という時代にはこれから紹介するような過激な発言がまだ許されたということでもあるだろう。¹²⁾もしもこれが「グリーン・ソロー」全盛の今日なされたとしたら、世の熱烈なソロー研究者を憤激させるか、恐らくは、爆笑させるのは必定であろう。

では、その内容は如何なるものか。引用に次ぐ引用でお見苦しいものになることを恐れるが、事情が事情だけにご辛抱願いたい。ヒンクリーはまず『コッド岬』冒頭部を引用しながら、「ここには観察に手慣れた者、観察の結果を表現するのに手慣れた者の姿がある」と一応ソローを持ち上げた後で、「では一体彼は何を見出したのか」と問い、「自らの高い学識を披瀝するための十二分なる機会を見出したのだ」と続ける。「誰それが何と言ったとか、どこそこの歴史家がこう言ったとかいう情報がたっぷり……うんざりさせられる」一方、「岬に関するソローの印象もあるにはあるが……岬の十全な説明やその特異な個性の分析を求める読者にとっては、それは何とも物足りないものとなっている」と言う。『コッド岬』には『コンコード川とメリマック川

の一週間』や『ウォールデン』以上に「ソローその人のエゴイズムが底に潜んでおり」、「すべてが自分と関連づけられなければ承知せず、哲学的な思索……は常に著者の個人的な偏見によって本来の正しい筋道から逸らされてしまうのである」と述べ、その実例として第8章「ハイランド灯台」の最終節を引き合いに出す。

さらに、第4章「浜辺」における「漂着物拾いの男」との出会いの場面が取り上げられ、ソローの人間性そのものに対して疑問が投げ掛けられる。激烈を極める内容なので、できるだけ本文に沿って訳出しておきたい。

こうした描写の仕方は、対象に心を寄せる観察者、慎ましやかではあるが気高い心の持ち主を見抜くような観察者の作品ではない。豊かで示唆に富んだ描写ではあるけれども、学識にのみ喜びを見出す学者の見解、書齋育ちの男の印象を述べたに過ぎず、そうした人間は、現実というものは自分の書物の中に、精神の中に取り込んでおり、書齋の外の世界はすべて信じがたい現実の幻影に過ぎないとでも思っているのだ。同じような知的傲慢が彼の他の作品にも散見される。彼が一番うれしいとき、それは自然から自分の都合のいい議論を抽出し、しかる後に、彼女を脇に放り出すとき、そして、あばずれ女に邪魔されることなく、颯爽とご立派な推論を積み上げてゆくときである。彼は人類と共にいはしない。雲をいただく塔のてっぺんから、抽象という言葉で人類に向かって語りかけている。彼にとっては、人類とは有象無象の集団、彼方の群衆に過ぎず、個々の人間の存在などは問題にもならず、カモメの群とも識別がつかないものなのだ。……彼にとっては、人間は標本にしか過ぎない。そして、好奇心に満ちた科学的正確さで、羽毛のない二足動物と羽毛をつけた二足動物の収集にいそしむのである。彼の水車にかかれば何だって粉々にされてしまう。どんなに愚鈍な粉ひきだってトウモロコシと小麦の区別はつきそうなものなのに。……ソローはケープの旅をしたとはいうものの、ウォールデン池の畔に留まっていた方がよかったかもしれない。……そこからは表面的な、偏見に満ちた、妙に虚ろな光景しか見えてこないからである。

他方、ベストンはと言えばという形で、先に紹介したビュエルの引用箇所が続く、ベストンが「先導者<ソロー>を凌いでいる」理由が述べられる。

「ベストンの岬の研究には書物からの受け売りが少なく、観察がもっとふんだんにある。哲学的議論が少なく、海と陸に関する真正で真摯な鑑賞がたっ

ぷりとあるからだ。」『コッド岬』が「ソローの日記」であるのに対して、『さいはての家』は「ケープコッドの日記」であり、前者では著者がヒーローであるのに対して、後者ではケープが自らの物語を語っているとされる。要は、「ベストンにおいては自己が見事なまでに抹消されており、この点ではベストンはソローの比ではなく、そうした自己抹殺という強みがあったからこそ、ソローがケープの表面を飛び跳ねただけなのに対して、ベストンは「陸の密やかな場所への、屈強な人々の心の襲への参入を許されたのだ」とする。「ベストンはケープの一部になったのだ。」

次いで、「自然の素晴らしいドラマの目撃者」としてのベストンの誕生が、『さいはての家』「浜辺」の第2章最終節を引用しながら紹介され、「想像力に満ちた洞察力」と「ナチュラリストとしての正確な観察力」が結合した結果、ケープコッドの忘れがたい光景が創り出された例として、「冬の訪問者たち」の最終節が引用される。また、ベストンが「人間の生と死を凝視」していたことを示す例として、モントクレア号の座礁の場面が、さらに、環境に生命を吹き込んだベストンの素晴らしい力量を示す例として、「冬至」第3章の一部——廃船が亡霊のように墓所から立ち上がる場面——が引用され、それと対比する形で、『コッド岬』第8章「ハイランド灯台」からの類似した場面が引き合いに出されて、「知的な陸の人間^{おかし}」でしかなかったソローの限界がここには露呈されているとする。またさらに、先に引用したソローの「漂着物拾いの男」の描写と比較対照する形で、ベストンの沿岸警備隊員の描写（「浜辺のランタン」第四章）が取り上げられ、評判の高いソローの「ウェルフリートのカキ養殖業者」のスケッチが、「平均的なケープコッダーの優れた描写でもなければ、それを代表するものでもない」ことが例証される。最後に、「恐らく海はあまりにも巨大で、ソローは満足に思索に浸ることなどできなかったのだろう。愛すべきウォールデン湖の畔を逍遙しているときにはそれができたのに。ソローとケープコッドとの出会いは、気紛れの、束の間の、表層的なものであったと言える。ソローは知己を得て、ベストンは友を得たのだ」としてこの論文は結ばれる。

このようなヒンクリーの論評が、ベストンの「師匠」たるソローに対するどれほど「不当な比較」になるのか、その判断は先に延ばして、次に、その「弟子」たるベストン本人のソロー観に目を転じてみたいと思う。

2. (不肖の?) 弟子からの抗議

ベストン自身、『さいはての家』が『コッド岬』と比べられるのを嫌ってい

たというのは有名な話しであり、「『ソローにはハートがない』と夫は常々申しておりました」という妻の証言がある。¹³⁾また、孫引きで申し訳ないのだが、ベストンがウィンフィールド・タウンリー・スコットに語ったという次のような生々しい証言もある。

ぼくはソローに繋がることになるのだとは思うけれども、ソローは読まないし、ソローの影響を受けたこともない。あの人はナチュラリストじゃないから。彼がもっとも関心を抱いているのは、個人生活——社会という集団の中の個人生活——を司る諸原理は何かということなんだ。もしぼくが誰かと連帯を感じるとするなら、それはリチャード・ジェフリーズだろうね。どちらも学究肌で、目に見える世界に詩的な喜びを感じる方だからね。¹⁴⁾

では、そうしたソロー嫌いのベストンが『コッド岬』への序文を書いたなら——実際に書いたのだから不思議なことだが——、一体どういうものができあがるのか。¹⁵⁾ちなみに、シャーマン・ポールもローレンス・ビュエルもソローに対するベストンの気持ちを知りながら、この序文については、ポールは「短い、当たり障りのない序文であり……ベストンはネイチャーライターの始祖としてソローを認知している」¹⁶⁾と述べ、ビュエルは「ヴィクトリア朝時代の気取った教訓的な誇張表現を排し、完璧に現代的な散文を著した最初のアメリカ人として、ベストンはソローを称え、読者との現代的な親近感に溢れ構成にも厳格な、ソローの現代的な傾向を指摘している」¹⁷⁾と述べるに留まっている。

それはポールの言う通り3頁あまりの5段落からなる確かに「短い」序文である。ただし、「当たり障りのない」ものであるかどうかは、保証の限りではない。段落を追いながら検証してみよう。第1段落はケープコッドへの讃歌となっている。ベストンはまるで『さいはての家』での筆致を再現するかのように、ケープコッドの自然を称えることから始める。ベストンの文学世界では、人間の存在そのものが矮小なものとして捉えられているとはいえ、雄大なケープの風景の中では、ソローの存在自体がいかにも小さなものに見えてしまう。書き出しは次の通りである。

ケープコッドの大いなる浜辺を初めて目にすれば、アメリカ全土における最も忘れがたい体験をしたことになる。北大西洋と面と向かい、それに足止めを食らわせている絶壁の高みから下を見下ろせば、広大で虚ろな大海原が想

像力を虜にしてしまう。陸の光彩の一つとしての海、季節の移ろいと日々の移ろいを映し出す海がそこにある。夏の青さを映し出す鏡が、張りつめたロープを思わせる地平線にまで延び広がっていることもあれば、荒れ狂う空の下、巨大な鉛色の嵐のうねりが岸に向かって咆哮していることもある。絶壁の何たるかを知るためには、ソローがやったように、何マイルにも亙って崖下を歩かなければならない。粘土と砂からなる浸食された壁と、どこまで行っても離れない、決して消えることのない波の叫びの間を歩かなければならないのである。

第2段落からは、いよいよソローへの言及が始まる。だが、それはまずもって「内陸部で生活を送り、塩水よりは真水に慣れた人間」としてのソローの紹介である。「彼は何マイルにも亙って切れ目なく続く外海の砂地を地図の上で見て、地理学的な関心を覚え、探検すれば益するところがあるだろうと思ったのだ」（傍点筆者）という言い方ともども、ケープには素人の功利主義的な余所者学者先生——ヒンクリーが指弾したソロー像そっくりだ——としてのソローが見えてくる。さらに、「こうしたソローも一旦ケープに到着するや、外海のみならず半島全域に及ぶあらゆるもの、……とりわけ植物に注意を向けた」として、ソローの「好奇心と想像力」がいかにも旺盛であったかのような印象を与えた後で、「生まれつき、ソローは鳥類学者というよりは植物学者だったのだろう。植物は動かないから、ソローにもそれを観察し熟考する十分な時間が取れたのだ」と述べてこの文節を閉じてしまう。何とも人を小馬鹿にした話しであり、観察者としてのソローの限界をそれとなく、だが鋭く指摘するベストンの辛辣な物言いがここにも感じられる。

第3段落でのベストンは『コッド岬』第4章「浜辺」の冒頭場面を俎上に載せて、ソローを難じようとする。ただし、作品を読み直すことまではしなかったようで、ここでは少々勇み足が目につく。例えば、「イースタムの村とその『塩の池』（“salt-pond”）の北を少し行ったところで崖を下りると……ソローのお目当てのものが見えた」とベストンは記し、「池」の住人たるソローを強調したいようだが、実際の原文では「高層湿原」（“an upland marsh”）となっており、これは明らかにベストンの負けである。また、第2段落で言及済みの「地図で見て興味を掻き立てられた何マイルにも亙る浜辺」こそがソローの「お目当てのもの」だとして、ベストンは暗に「地図で既に見たものをソローは再確認したに過ぎない」とでも言いたいらしいのだが、同じ章の少し先の方で、ソローは「地図で見たり、駅馬車の窓から眺めたりするの

とは大違いだった。地図で写し取ることも、勝手に色づけすることもできない……本物のコッド岬だった！これが『物自体』というものだ¹⁸⁾との感想を述べているから、ここでもベストンの意図は一応空振りに終わっていると言える。

それでは、ソローに対するベストンの難癖がすべての外的なものかと言えば、そうでもない。浜辺が広大でありその眺望が雄大であることを、ソローは繰り返し繰り返し強調していた。「見渡す限り、泡立つ波が砂浜に寄せては返していた」とか、「これから歩くことになる土地の様子を眺めたときは、なんともいえない気分になったものだ」とか、「さらに遠くに目をやると、岬の前腕部に沿って続いている浅瀬の上に、明るい緑色の海水が広がっていた」とか、「私たちは累壁の上に立って、岬の大部分を見渡した」とかいった調子でそれは語られていた。これがベストンの絶好の攻撃材料となる。ベストンは執拗にそうした描写の欺瞞性を暴露しようとする。そして、それにはもっともな理由がある。すなわち、「東側の累壁は西に向かって穏やかにカーブしているから、浜辺の北側の眺望は完全には得られず、数マイル先まで見えればよしとしなければならない」ということが一つ。さらに、その日は雨だったのだから、「視界の先は雨と海霧で煙っていたに違いない」はずなのである。おまけに、ソローが力説する「眺望」ではなく、そうした「靄」こそが「海岸の砂浜に不思議な美しさを添えるものなのだ」と付け加えることもベストンは忘れない。ベストンは、多少の勇み足は犯しながらも、ソローの文章はうそっぱちだらけだと嗤っている。「『コッド岬』執筆のために掻き集められた古い文献の文学的基盤としてのみ、＜ソローの＞巡礼は機能しているのである」——すなわち、ソローのケープコッド巡礼は自然との直の対峙ではなく、書物での知識の追体験に終始していたとするヒンクリーの指摘を、何とも隠微に、何とも痛烈に繰り返してベストンは本段落を閉じるのである。

そして、これに続く第4段落の冒頭に来るのがビュエルが引用していた箇所である。ビュエルの要約——「ヴィクトリア朝時代の気取った教訓的な誇張表現を排し、完璧に現代的な散文を著した最初のアメリカ人として、ベストンはソローを称え、読者との現代的な親近感に溢れ構成にも厳格な、ソローの現代的な傾向を指摘している」——の妥当性を検討するためにも、序文のその部分を訳出してみよう。

ソローこそは完璧に現代的な散文を書いた最初のアメリカ人だという事実をアメリカ文学史家たちが見落としているとは、何と不可解なことだろう。1

8世紀ニューイングランド……から継承してきたような文学作法の残滓は、ソローの著作群のどこを探してみてもこれっぽっちも見つからない。……気取った教訓的な誇張表現など、どこにも見当たらないのである。ソローの散文は、読者との現代特有の親近感に溢れており、構成に厳格であるという現代性までも備えている。『コッド岬』には古物研究的なところなど微塵もないのだ。

「現代」に対するベストンの憎悪に近い感情は『さいはての家』のそここに散見され、¹⁹⁾訳出した部分を字義通りに取ったとしても、それが果たしてソローに対する賛辞になるのかどうか怪しいものだが、そもそも、この部分を字面通りに受け取ることなど、これまでのベストンの筆捌きからも、また、ここでの大仰な否定の仕方を見ても、不可能なことと言わなければなるまい。逆に、ベストンがここで指摘し難じているのは、『コッド岬』の持つ「18世紀ニューイングランド」的古さであり、「気取った教訓的な誇張表現」に代表される文学作法であり、「古物研究的な」側面であるだろう。「読者との親近感」や「構成の厳格さ」にも欠けるというのがベストンの言わんとするところではないかと誤読せざるを得なくなる。

『コッド岬』そのものにそうした批判を許すような素地があることについては、いちいち例証するまでもないだろう。膨大な数に及ぶ引用文献を一瞥するだけでも、ある程度の納得は得られるのではないか。あるいはまた、第3章「ノーセットの平原」の後半部は（最終章「プロヴィンスタウン」同様）種々の引用から成り立っており、ソロー自身、「読者の皆さんに、ノーセット平原がどれほど広く独特であったか、それを横断するのにどれほど長い時間を要したかなどを理解して頂くためには、物語の途中でこうした長たらしい抜粋を各処にはさむ以外によい方法がみつからなかったまでのことである」と述べて、弁解しているけれども、弁解したいソローの気持ちは痛いほど分かるとはいえ、もっと「よい方法」が見つかっても良さそうなものだという感想を抱かざるを得ない。さらには、同行者エラリー・チャニングがソローに向かって、「君は人^{センチメント}情のかけらもない人間だね」という言葉をなげつける場面（第4章「浜辺」）があるが、その評言が全くの的外れではないことはソロー自身も認めているはずだ。ここでも、ヒンクリーの指摘したソローの側面、すなわち、読者をそっちのけに学識をのみ振りかざす、人間嫌いとしての側面がベストンによって繰り返されていると言えはしまいか。

同じ段落でベストンは続けて、「一人の人間としてのソローの姿が作品から

垣間見える点が特に興味を惹く」と述べる。それでは、『コッド岬』から如何なるソローの人間像が浮かび上がってくるとベストンは言うのか。「ナチュラルリストを幾分越えた存在」と言われれば誉め言葉に聞こえてしまうが、「あの緑なるアメリカの新たなる地域」「彼が最初に精神的、知的忠誠を感じた地域」に「観察に出かける途上にある人間に見える」（傍点筆者）と続けられると、いささか雲行きが怪しくなってくる。そもそも、その「地域」とは、ケーブコッドならぬウォールデン池を指しているのではないかと読めてしまうし、よしんばそうでないにしても、そこでの観察の「途上にある」と言うのだから、何ともすさまじいベストンの物言いではないか。案の定、これに続けて、「ウォールデン池に佇む人間、個人主義的で、その奇行が……誇張されてきた人間」（傍点筆者）、「旅行中のコンコード・ヤンキー」、「ヤンキーの行商人」、「いまましい本の行商人」としてのソローの姿が頁の間から見え隠れすると言ってはばからない。「本の行商人」という最後の呼称はカキ養殖業者の知恵遅れの息子の評言であり、ここではその冒頭部分だけが引用されているのだけれども、その後続く科白——「年がら年中本のことばかり言ってやがる。もっとまじな仕事はねえのか。くそいまましい。二人とも撃ち殺してやる」——こそが、作品から浮上するソローという人間像に対するベストンの密かな思いだと思えるのは、あまりにも突飛に過ぎるだろうか。

そして、いよいよ最後の第5段落。「ソローの訪問以来、半島はすっかり夏季休暇の支配下に入ってしまった。しかし、その支配が及ぶのも外海まで。ソローのケーブを求めてやってくる人は、目さえ開いていればそれが見つかるだろう」という書き出し。「旅行中のコンコードのヤンキー」としてソローを規定したベストンだから、また、ソロー自身が第10章「プロヴィンスタウン」で、「いつの日か、この海岸は、浜辺をぜひ訪れようというニューイングランド人たちにとって格好のリゾート地となるに違いない」と予言していたこともあって、ベストンは何ともぶっきらぼうな、突き放した口調で、ソローと夏の避暑客たちを一絡げにして一蹴する。²⁰⁾しかるのちに、序文冒頭でやってみせたのと同じように、『さいはての家』そのものを彷彿とさせる見事なケーブの描写を展開してみせるのである。

一〇〇年に及ぶ強風と砕け波との戦い、一〇〇年に及ぶ潮との格闘が累壁を舞台に繰り広げられてきた……けれども、癒されることのない、飽くことのない海に向かって累壁はいまだに対峙し続けている。……砕け波の渦巻きが近づき、鎌首をもたげ、倒れ、崩れる。輝き、泡、湿気、磯の香りの上を、

小さな岸辺の鳥たちが静かに疾駆してゆく。²¹⁾

ソローの『コッド岬』に寄せたベストンの序文の最終行は次の通りである。「高貴な世界であり、そうした世界があつた強情でユニークな天才の想像力を一度は刺激したということ、喜びたいと思う。アメリカのネイチャーライティングという偉大なる伝統は彼に由来しているからである。」これをもってシャーマン・ポールは「当たり障りのない序文であり……ベストンはネイチャーライターの始祖としてソローを認知している」と「序文」全体を要約したのであつたが、その実体はこれまで詳述してきた通りである。「当たり障りのない序文」であるどころか、「序文」として収録されたことが不思議に思われるほどの難物であつた。ソローに対するヒンクリーの非難・批判を踏襲・増幅しつつ、それを隠微にほのめかした悪口雑言の「序文」であり、最後に、取って付けたような一文がこれ見よがしに添えられているというのが実状ではないか。

以上、ヒンクリー及びベストンのソローに対する非難・中傷を詳しく見てきた。少々過熱気味のソロー熱とは少し距離を置いて、取りざたされることの少ないヘンリー・ベストンというもう一人のヘンリーにも読者の注意を喚起したいというのがその意図であつたのだが、このままでは負け犬の遠吠えを紹介するだけの印象しか残らず、いかにも後味が悪いので、ベストンにも造詣が深いロバート・フィンチが『コッド岬』に寄せた序文——筆者の知る限り最も優れた『コッド岬』論の一つ——を次に紹介して口直しとしたい。²²⁾

3. 孫弟子からの反論

フィンチがベストンの「序文」を読んでいることは、フィンチ自身の「序文」の最終節にベストンからの章句——「強情でユニークな天才」——が引用されていることから明らかだが、それ以上に、フィンチは（ポールやビューエルとは違って）ベストンの「序文」の言わんとするところをきちんと把握していたと言える。言い忘れたけれども、フィンチは、『さいはての家』と並んで、『コッド岬』の影響も強く受けている。だから、この「序文」を執筆中のフィンチは、二人の「師匠」の間でいわば板挟みの状態にあつたと言える。そうした辛い立場にありながら、一人の「師匠」から別の「師匠」へと投げつけられた疑念をフィンチはしっかりと受けとめ、そうした疑念に真摯に応えつつ、公平な裁定者たらんとしている。ただし、その裁定が、結果として、ソロー弁護に終止するものとなっていることも事実ではある。（「序文」とは、

本来、そうした性質を持つことを余儀なくされているものなのだろう。(ベストンの場合のように、例外はあるけれども。)

例えば、「ソローがケープで過ごした時間は3週間くらいにしかならなかった」ものの、「大抵の訪問者ならソローの何十分の一の観察しかできなかったろうし、ケープの住人でもソローほどの探検を行っている者は少ないだろう」というフィンチの発言は、ソローはただの「旅行者」に過ぎなかったではないかというベストンの指摘を念頭に置いての反論だろう。また、「ソローはケープコッドに関する入手可能な書物と地図のほとんどすべてに目を通した」ことを認めつつ、「ソローの良さが一番発揮されるのはそうした二次資料から離れて、『物自体』に焦点を合わせた時だ」と弁明して、ベストンが敢えて無視した「浜辺」後半の場面をフィンチが引用するのも、ソローの記述があまりにも書物からの知識に縛られているとのベストンの非難を意識してのことだろう。ソローの人間嫌い云々に関しては、「反社会的な人間嫌いとしての世評がソローにはつきまとっている」ことを認めた上で、「だからこそ、本書に見られる<ソローの>社交的側面に読者は驚くのではないか」とフィンチは反論する。「自然と一つになって生活しているケープコッターに対して、ソローは特別な精神的親近感を感じており、……彼らは風景の一部になっている」とさえ抗弁する。(「ベストンはケープの一部になったのだ」というヒンクリーの言葉をもじったものか。)さらに、コンコードを離れて休暇中のソローは旅行者としての匿名性に浮かれており、「本の行商」や「銀行強盗」に間違われても、それを楽しんでいるふしがあるとして、こうしたソローの気分こそが「例を見ないほどの豊かな……ヒューモア」に繋がっているのだとし、そうした「高揚した気分」こそが本書の持ち味なのださえフィンチは断言するが、これも、ベストンが第4段落後半で列挙したソロー像への批判を強く意識した上での発言であることは明らかだ。偏見に満ちた書であるとの非難に対しては、「浜辺」最終行の「私がこの旅を感傷^{センチメンタル}旅行にしたくなかったことは事実だ」を引用しつつ、「広大なモルグ」としての浜辺の描写を紹介して、「人間的な価値観や欲望を反映したりそれに迎合することをきっぱりと拒んだ……『真摯な書』」であることを強調する。『コッド岬』は一方では「炉端の慰めと暖かな人間関係」を称えつつ、「巨大で不毛なケープの海の光景」をそれに対置させて、「我々の人間観、世界観の改訂、逆転」²³⁾をもくろんでいるのだと要約して、フィンチはその序文を閉じるのである。

結び

さて、ここまで結論を先送りにしてきたヒンクリー論の妥当性に関しては、一体どういう答えを出したのか。「師匠に対する不当な比較」とビュエルが難じたヒンクリーのソロー批判を、当の「弟子」であるベストン自身が増幅させる形で繰り返していることを思うと、そこには「(不肖の?) 弟子」としての屈折した気持ちがあるにせよ、また、指摘してきたようなベストン側の勇み足があるとはいえ、『コッド岬』には看過し得ないほどの瑕疵——恐らくは『さいはての家』と併置したときに明るみになるような類の——瑕疵が存在することは否定できないように思う。確かに、フィンチの優れた序文は『コッド岬』の美点と特質を巧みに紹介するだけでなく、作品に向けられた攻撃を見事にかわしてはいるけれども、攻撃を受けるだけの弱点がそこに内在する可能性までも否定してはいないだろう。²⁴⁾

最後に、『さいはての家』に寄せられた古い書評をもう一つだけ紹介して、『さいはての家』が『コッド岬』と並び称されるに足る作品であることを確認しておきたいと思う。それは、アメリカ文芸批評の泰斗でありハーヴァード大学でベストンの少し先輩であったヴァン・ワイク・ブルックス(Van Wyck Brooks, 1886-1963)が『さいはての家』の出版直後に著した1頁にも満たない短いものである。²⁵⁾ヒンクリーのそれとは対照的に、穏当を極めたものではあるけれども、さすがブルックスだけのことはあって、見事にポイントをついている。その要点だけをまとめておこう。

1. 『さいはての家』は、ソローの『コッド岬』以来、ケープコッドについて書かれた最良の作品である。²⁶⁾
2. 『さいはての家』はケープの自然の美と生活をソロー以上に見事に伝えている。
3. 『さいはての家』は、「より優れた前任者」ソローと比較すると、人物描写が少ない分「ナチュラリスト」の部分が多く、「ヒューマニスト」の部分が少ない。だが、ベストンはソロー以上の「散文の詩人」である。ベストンの文体の方が丁寧で、画趣に富み、よりロマンチックだからである。

以上、ソローの『コッド岬』とベストンの『さいはての家』に関する幾つかの論評を取り上げ、その内容を吟味してみた。拙論が『さいはての家』の再評価の一端に繋がることを期待して、一応の結びとしたい。

註

1. 1996年8月23日、筆者のインタビューに答えたフィンチの発言。
2. ロバート・フィンチ『ケープコッドの潮風』（松柏社、1995年）；「フィンチの鯨学」、スコット・スロヴィック/野田研一編『アメリカ文学の〈自然〉を読む』（ミネルヴァ書房、1996年）所収、を参照されたい。
3. 『ユリイカ』ネイチャーライティング特集号（青土社、1996年）、239-40。
4. Henry Beston, *The Outermost House: A Year of Life on the Great Beach of Cape Cod*. New York: Henry Holt and Company, 1988. なお、本書に収録されているフィンチの序文は優れたベストン論となっているのだが、今回はそれについて論じることはできなかった。
5. Sherman Paul, *For Love of the World: Essays on Nature Writers*. Iowa City: University of Iowa Press, 1992. 111.
6. フィンチはベストンがキャノンとして認められつつあることを紹介しながらも、アルド・レオポルドやレイチェル・カーソンとは一線を画しているとする。Finch (1988), xviii.
7. 例えば、Scott Slovic ed., *Worldly Words: An Anthology of American Nature Writing*. Tokyo: Fumikura Press, 1995. 13を参照されたい。
8. Lawrence Buell, *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1995.
9. Russell Reising, *The Unusable Past: Theory & the Study of American Literature*. New York: Methuen, 1986. なお、本間・村上・野田による邦訳（松柏社、1993年）がある。
10. Edward B. Hinckley, "Thoreau and Beston: Two Observers of Cape Cod" *The New England Quarterly*, 4 (1931). 216-29.

11. Buell, 531.
12. Buell, 339-69を参照されたい。なお, Frederick O. Waage, "American Literary Environmentalism, 1864-1920" Frederick O. Waage ed., *Teaching Environmental Literature: Materials, Methods, Resources*. New York: The Modern Language Association of America, 1985, 32によると, ソロー熱発生にとって, 1894年という年が重要な節目に当たる年だそうだから, ヒンクリーのソロー批判は, 時代遅れも甚だしい発言, もしくは, 極めて勇気ある発言と言えそうだ。
13. Elizabeth Coastworth, *Especially Maine: The Natural World of Henry Beston from Cape Cod to the St. Lawrence*. Brattleboro, Vermont: The Stephen Greene Press, 1970. 2.
14. Paul, 121.
15. Henry David Thoreau, *Cape Cod*. New York: W. W. Norton & Company, 1951. 7-10.
16. Paul, 121.
17. Buell, 480.
18. 『コッド岬』の訳はすべて飯田実氏のものを借用させていただいた(工作舎, 1993年)。
19. 例えば, Beston, 10, 186-7.
20. ソローの名誉のために言っておくと, この予言には続きがある。「今のところ社交界の人間にはまったく知られていないし, これからも彼らにとって楽しい場所とは決してならないだろう。ここへ遊びに来る連中の求めているものが, ボーリングや遊園地の巡回馬車やミント・ジュレップの海だとすれば——……——こうした人々はいつまでもコッド岬に失望し続けるだろう。」だが, ベストンの耳にはソローの予言のこの後半部分は届いていない。夏の避暑客たちを先導する張本人としてしか映っていないからである。
21. ポールはこの数行を「ベストンの散文の最良の見本」と呼ぶ。Paul, 121.

22. Henry David Thoreau, *Cape Cod*. Hyannis, Massachusetts: Parnassus Imprints, Inc., 1984. vii-xv.
23. こうした「視点の逆転」を促す例をフィンチはメルヴィルの『白鯨』にも見出し、それゆえ『白鯨』をも「第一級のネイチャーライティングの好例」だとする。Daniel Halpern ed., *On Nature: Nature, Landscape, and Natural History*. San Francisco: North Point Press, 1987.
24. これ以上この件に深入りすることは差し控えたいと思うが、エゴ/エコにまつわる問題について一言触れておきたい。『コッド岬』にはエゴが充満している分エコは後退し、『さいはての家』ではエゴの消滅に代わってエコの前景化が図られている、といったような単純な図式化はもはや通用しないだろうし、グレン・ラヴが高らかに宣言した「エゴからエコへの転換」も、氏が期待するほどスムーズにことが運ぶとは思われない。エゴとエコとは不可分の存在であり、両者は時に対立し、時に相互補完し、時に相手を呑み込む存在であろう。こうした両者の関係が十全に捉えられていれば、その作品はある程度の成功を収めたと言えるし、それが不十分な場合には、異議が差し挟まれることになるのではないか。この問題はネイチャーライティング研究における永遠の課題の一つであると思われる。Glen A. Love, “Revaluing Nature: Toward An Ecological Criticism.” *Western American Literature*, 25 (Fall, 1990)及び、拙論「ロバート・フィンチの場所の感覚」(『金沢大学教養部論集——人文科学編』33/2, 1996年, 所収)を参照されたい。
25. *The New England Quarterly* 2 (1929), 694. なお、この論文の存在もビュエルによって教えられた。Buell, 531.
26. 高田氏の紹介にもある通り、ジョン・ヘイの『大いなる浜辺』、フィンチの『ケープコッドの潮風』等、ケープコッドを舞台にした作品が近年幾つか出版されているので、ブルックスのこの評価は訂正を求められるかもしれない。ただし、ポールは、ヘイの『大いなる浜辺』とフィンチの別の作品(*Outlands: Journeys to the Outer Edges of Cape Cod*)を引き合いに出して、『さいはての家』の方が両者よりも優れていると判定している。Paul, 119-20.